

伏見公民館だより

令和4年度第1号（令和4年6月発行）

（公財）奈良市生涯学習財団

伏見公民館

〒631-0841 奈良市青野町二丁目
13番4号

TEL・FAX 0742-45-9864

E-mail fushimi@manabunara.jp



今年度も伏見公民館では、緩やかに主催事業が動き出し、順調な滑り出しで始まりました。女性フォーラム開講式、伏見みやび学級開講式、楽しい絵本の時間とすべてがうまくいっています。六月中旬には、第2回女性フォーラム、第2回伏見みやび学級、万葉集の世界の3つの講座が3日間連続で行われ、いずれの講座も大盛況でした。ただ私自身発熱が5日間も続き余儀なく欠席しました。コロナ等は陰性だったのですが、個人の病院では当然診察してもらえず、大きな総合病院でも救急用入り口で検査等数時間待った末にやっと点滴してもらいました。このご時世発熱したら診察してもらおうのが大変です。お互いに健康には、くれぐれも注意しなくてはいけないと肝に銘じました。

さて、新型コロナウイルスの影響を受け経済活動が停滞し、暗いニュースが続いている中で、伏見地区の「つながり」や「絆」を深めるために昨年度暮れ、「伏見まつり」を再開させようと考えました。そして「伏見まつり実行委員会」を立ち上げました。これまでコロナ以前は、公民館は「公民館まつり」の単独事業でしたし、「伏見まつり」は伏見小学校主催の学校行事でした。すなわち、前者は公民館利用者を対象に、後者は小学校の児童を対象に行ってまいりましたが、今年度からの「伏見まつり」は対象が地域住民全員となります。会場も公民館、ふれあい会館、小学校の3会場で、伏見地区全体として盛り上がりたと思います。出店、出展、舞台発表と催しにワクワクしたり、地域をスタンプラリーでまわったり、大人も子どもも一日中楽しめる「まつり」にしたいと思います。また、この「伏見まつり」の取り組みは、地域のつながりの輪を広げ、引きこもりがちな方々への社会参加や助け合い活動の発展、災害時の連携など、今までそれぞれの場で積み重ねてきた活動がよりバージョンアップにつながることを期待しています。ちなみに、「伏見まつり」は毎年11月の第一土曜日に開催します。また、これからいろいろな企画を予定していますので是非楽しみてください。そして元気に公民館へお越しください。

「花の色は 移りにけりな いたづらに わが身世にふる なかめせしみに」この句は皆さんもご存じの小倉百人一首に収められている小野小町の9番です。その意味は、「桜の花はおなしく色あせてしまった。長雨が降っていた間に」と訳せます。蛇足ですが「花の色は」は、桜の花の色のことを指し、「移りにけりな」は色があせることを意味します。「よにふる」とは、世渡りすることの世に「経る」と雨が「降る」をかけています。また、「ながめ」は「長雨」と「眺め」をかけています。この詩からもわかりますが、あらゆるものはみな等しく枯れ、色あせ、衰え、やがて滅していくものです。お釈迦さまも「この世は無常であり、不変のものはない」と説いています。六月に入り、徐々に暑くなってきました。公民館の桜の木にも青々しい葉が茂り、庭先のユリも大きく咲き、季節は梅雨の長雨と夏至を超え夏へと変わってきています。そのような中でも時は通り過ぎてゆくものです。私たちは、その時その一瞬を大切に過ごしていきたいものですね。

井貝



公民館は只今、花ざかりです。



裏面へ続く

こんな講座ありました



伏見みやび学級

6月15日、奈良ヤクルトさんを講師にお迎えし「食育と食文化」についてお話いただきました。おせち料理についてや節句のお話、夏野菜の栄養について等知っているようで知らないことが盛りだくさんでした。その中の一つに奈良県の名産について「小麦もち」が紹介されました。別名「半夏生餅」「早苗振餅」ともよばれ、今年収穫した小麦で作るお餅です。田植えが無事に終わったことを感謝して、田の神様にお供えするものだそうです。「さなぶり」とは「早苗」の頃で、「半夏生」は夏至から数えて11日目をさし、その頃に田植えを終えることからその別名があるようです。主に奈良の中部で作られているというお話でした。そう言えば、耳成付近の道の駅で見かけたことを思い出しました。みなさんも是非一度ご賞味ください！

万葉集の世界

6月16日、昨年度に引き続き上田善紀さんに講師をご依頼し、開催しました。万葉集の歌を読み解く前に、まず飛鳥宮のお話からはじめていただき、歌が詠まれた時代の背景を学びました。歴史上名のある人物から作者未詳の人物まで講師のセレクトで歌が紹介されました。中でも大海人皇子（天武天皇）と中大兄皇子（天智天皇）に愛された額田王の歌はたくさん解説されました。歌にはそれぞれ思いがあり作られています、歌人が生きた時代だからこそ生まれた歌も数多くあり、時代背景を知ることの大切さがわかりました。受講生の方からもそのような声があがっていました。熱意ある講義にみなさんぐっと引き込まれている様子でした。また質疑応答にも丁寧に回答いただきました。

職員のつぶやき

休日の帰り道、突然の雨にとまどいながら、山道をくだる。木々の切れ間から雨がゆるやかにふりそそぎ、雨音が耳に響く。ほどけた靴紐を結び直し、顔をあげたその先に白い花が。紫陽花。自然に深いため息がひとつ。静かな時間。人はそれぞれの道を歩いていて、予測できないことにぶつかりながらも自分の物語を紡いでいく。時に会えるそれが宿命なのかそれとも運命なのかわからないこともあり、書き直せないストーリーにところが沈む。紫陽花は、小さな花と一緒に暮らしてひとつの花。みんなで光をあつめて同じ明日を夢みている。そうか。光の粒。手のひらにのる小さな光のかげらをつなげてできる明日への道しるべ。宿命ではなく運命だと信じて切り開く。雨に揺れる紫陽花が冷えたからだを包んでくれた。そういえば、白い紫陽花の花言葉は「寛容」だった気がする。「あじさい通り」の歌を口ずさみながら休日の扉を閉めた。



脇本

6月と言えば梅雨の季節ですね。



何故、梅の雨と書くのでしょうか？

6月と言えば梅の花はとくに散っている時期なのに不思議ですね。

今は、便利なものでスマホがあれば直ぐに調べられます。一説によると、中国から伝わった言葉らしいです。

もともと雨が多く霪(かび)が生えやすい時期であることから霪雨(ばいう)と呼ばれていたそうです。そこで同音である梅雨になったそうです。

漢字はわかりますが、何故つゆと読むかが疑問です。

雨が多い時期であることから「露に濡れて湿っぽい」という意味を持つ「露けし」からとったとする説と、梅が熟して潰れる時期であることや長雨により食べ物や衣類が傷んでしまう時期であることから「潰ゆ(ついゆ)」とする説があります。

ジメジメする季節ですが霪に負けずに梅のようにスッキリ爽やかに過ごしたいですね！

貴田